

埋立地浸出水からエコ次亜

水ing 松山で1号案件稼働

水ingは、最終処分場（埋め立て処分場）から排出される浸出水を脱塩処理した後の濃縮水を電気分解して消毒剤に使われる次亜塩素酸ナトリウム（エコ次亜）を生成するシステムの普及を進める。濃縮水を乾かして乾燥塩として保管した後、廃棄物として処分する場合に比べ、乾燥に必要なエネルギーや保管・処分のコストを大幅に削減できる。このほど愛媛県松山市で国内初となる同社第1号案件が本格稼働した。今後年間1〜2件の受注を目指す。



本格稼働を開始した松山市横谷埋立センターのエコ次亜生成システム

下水処理の消毒剤に

一般廃棄物の最終処分場では生ごみなど有機物を主に埋め立てていたが、有価物回収のためのごみ分別が進むとともに、ごみ減量化のため中間処分場で焼却処理した後の焼却灰（主灰、飛灰）が持ち込まれる割合が増えている。

焼却灰には多くの塩類が含まれている。降雨で洗い流された後に出てくる浸出水の塩類は海水の濃度に近く、塩害や農業用水などの放流基準に適

合できなくなる恐れがある。また、ゲリラ豪雨など気候変動に対応し人工的に散水して浸出水量を制御する屋根付きの最終処分場も多く、浸出水を脱塩処理して循環利用した無放流型の処分場も増えている。

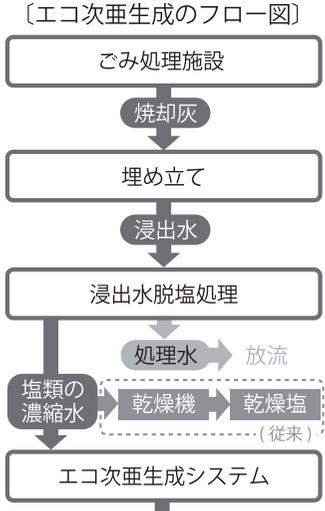
脱塩処理した後の塩類の濃縮水は乾燥機で乾かし乾燥塩として回収するが、長期保管が難しい。最終的には廃棄物として専門業者に処分を委託するしかない。燃料代や保

管、処分費用の削減が課題となっている。エコ次亜は処分場由来の次亜塩素酸ナトリウムで、市販品と区別するため福岡大学樋口壮太郎教授が提唱。水ingはエコサニーの商標で展開している。

開発したシステムは、塩類の濃縮水を電気分解してエコ次亜を生成する。独自の電極構造を採用するとともに、キレート処理で電極に付着し悪影響を及ぼすスケールと

同20件近く計画されている。このうち農業用水、河川の清流に放流する山間部の処分場や、無放流型の最終処分場を中心に提案する。

今回は、管轄が異なる最終処分場（環境省）と下水処理場（国土交通省）が連携してエコ次亜を利用する「松山方式」だが、最終処分場の併設が多く、環境省が管轄するし尿処理場での利用など新たな用途も開拓するなど幅広いニーズに応えていく。



従来、濃縮水は乾燥させ、取り出した塩類を保管、廃棄処分していた。エコ次亜を生成することで廃水処理設備などで有効利用できる。

水ingは全国1200カ所の最終処分場のうち210カ所に浸出水処理や脱塩処理などのソリ